

平成 29 年度「私立大学研究ブランディング事業」  
『立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト』外部評価シート

|        |   |
|--------|---|
| 事業名    | 立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト   |
| 大学名    | 立正大学  |
| 申請タイプ  | タイプB  |
| 評価対象年度 | 平成 30 年度  |
| 事業概要   | <p>本事業は、本学の特色を生かした学際的領域の研究事業である。ウズベキスタン研究機関との学術協定に基づき、現地研究者と共同で当地に残る古代仏教遺跡の発掘、保存修復、科学分析を行い、日本への仏教展開過程を明らかにする。そして 2015 年に安倍首相と故カリモフ前大統領が発表した共同声明の内容を深化すべく、当地での発見を内外に公表し、研究事業への展開や教育交流など、学術・教育両面での成果を還元することを目指す。</p>  |
| 事業目的   | <p>本事業は、ウズベキスタン共和国科学アカデミー等との協定に基づき、現地研究者と共同で当地に残る古代仏教伽藍址の発掘、保存修復、出土物の整理調査および科学的分析を行い、ユーラシア大陸における仏教文化の展開過程の一端を明らかにすることを主目的としている。また立正大学は日蓮宗の僧侶の教育機関を淵源としており、日蓮の社会貢献への誓いを現代的に言い換えた「正しきを立てて、安穏な社会、平和な世界に寄与しよう」という立正精神を「建学の精神」としている。しかし、現状では本学の独自性や建学の精神について広く認知されているとは言い難く、今後一層の努力と貢献が求められている。そこで、「仏教学・歴史学・考古学・地理学」という創設以来の学問領域に端緒となる課題をおきつつ、8 学部 15 学科からなる総合大学として広く研究者の参画を求めやすく、かつ我が国の研究者にとって未解明な領域を多く含む課題を設定することで、本学の独自性と建学の精神を活かした貢献ができると考えた。ウズベキスタンは旧ソ連の経済圏に属し、かつイスラム教を国教としているという点では日本の現代社会のありたかとは距離がある一方で、親日国であることから、今後の相互交流や研究によって得られる人脈や知識には双方に新たな可能性を期待できる。</p> <p>本学の蓄積ある学問を誠実に深めていくことで、我が国の文化や世界のなりたちの一端を解き明かし、世界の人々が希求する平和かつ文化的な交流に貢献する総合大学というイメージを定着させたい。</p> |

| 評価年度における<br>自己点検・評価項目                          | 達成度評価<br>S・A・B・<br>C | 内容等の記述  |
|--|----------------------|---|
| 総合評価（所見・事業全体としての概評）                            | A                    | <p>事業全体として、ズルマラ仏塔のレーザー探査を行うなど、調査は有意義である。ウズベキスタン本国の研究者と連携し、さらなる共同研究が望まれる。</p> <p>ブランディングという観点からみても、各種メディアを通じて積極的に活動しており、学内・学外へのアピールは十分達成されているものと思われる。</p> <p>文科省のブランディング事業としては本年度で最後となったが、貴学がこの事業を継続し、両国の文化交流の発展に寄与されることを望む。</p> |
| 実施目標・実施計画<br>・設定の適切さ、実現性<br>・適切な運営体制の整備        | A                    | <p>実施目標・実施計画は十分に評価できる。今後も、ズルマラ仏塔に関する調査・保全に尽力されることが望ましい。</p> <p>昨今、どの大学でもIRの重要性が増している。今後、ブランディング力を強化するため、貴学独自の分析組織を立ち上げて、複合的評価をおこなうことを提案したい。</p> <p>発掘遺物の保全については、先方とどのような形で合意を得られるか次第で到達点が変わってくると思われる。</p>                       |
| 事業成果<br>・研究活動<br>・学外へのブランディング※<br>・学内へのブランディング | A                    | <p>十分な成果が出ていると認められる。特に、学外ブランディングについては、昨年度の計画通り、TV、新聞掲載を通じて十分に学外にアピール出来たと思われる。また、シンポジウムが盛況であったことも、その成功が窺える。また、ウズベキスタン現地調査において、貴学の大学院生も参加</p>   |

|               |   |  |
|---------------|---|--|
|               |   | <p>した事は、学内ブランディングや教育上、非常に有意義であったと考える。</p> <p>今後も、他大学や公の機関と提携しながら活動することによって、更なるブランディング力の強化が望まれる。</p> <p>本プロジェクトを通じて、貴学の在学生・卒業生が母校を誇りに出来るような活動を継続して行くことが肝要であり、学内での自己肯定感を高めていくことも求められる。今後もますます、ウズベキスタンとの文化交流が発展することを期待する。</p> |
| 補助金・研究費の使用妥当性 | A | <p>妥当な使用だと判断できる。</p>   |

※ 学外へのブランディングは、日本でのブランディング・ウズベキスタンでのブランディングをそれぞれ別に評価する

※達成度評価の基準

- S：当初の計画・目標を大幅に上回っている。
- A：当初の計画・目標を上回っている。
- B：当初の計画・目標をおおむね達成している。
- C：当初の計画・目標を下回っている。

【外部評価委員会委員（氏名五十音順、敬称略）】

有賀祥隆（東京藝術大学客員教授、東北大学名誉教授）  
 佐伯孝弘（清泉女子大学学長）  
 島谷弘幸（九州国立博物館長）

中野照男（東京文化財研究所 文化遺産国際協力コンソーシアム事務局長）